

での癌を比較しても女性の方が癌の発症例が多く、これは体質的なものではなく、ホルモン等が異なるためと看られています。

ただし、この例は放射線の影響があった場合で、放射線の影響がない場合は、男性が癌にかかる率、死亡率でも男性の方が圧倒的に多いのですが、放射線の影響があると女性の癌発症が多くなるのです。

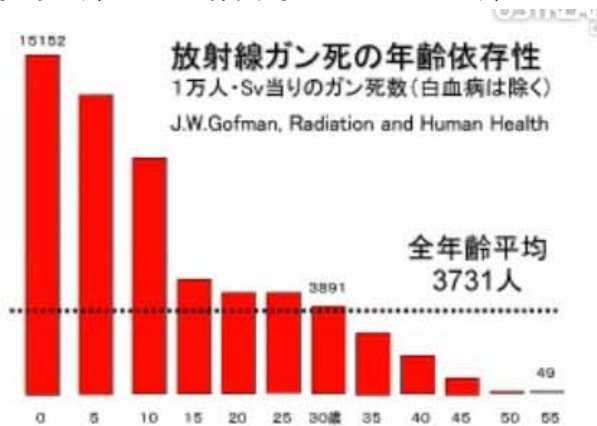
何故、放射線の影響を受けると女性の方がリスクが高いのか、女性の方が放射線に対する感受性が強いのと、罹患する部位が多いことがあり、セシウムの内部被曝の場合、男性は筋肉に蓄積しますが、女性の場合は筋肉量が少ないので子宮や乳腺に蓄えてしまうことが多いのです。

また、女性は妊娠や授乳等により胎児や乳児に対する影響もあります。

外部被曝、内部被曝で最も放射線により被曝の影響を受けるのは胎児です。

胎児に対する直接的な影響は、放射線は細胞分裂を阻害するのです。

さらに、子供に対する悪影響として、放射線量は地表に近い方が高くなりますから、大人は顔まで 150cm あるとすれば、子供は 100cm 前後ですから、より多くの放射線を浴びてしまうことになり、放射線はより弱い子供により多くの影響を与えることになります。



がん	平均で200 ³ シーベルトの放射線を受けた人たちのがんリスクは1.1倍になった。通常、30歳から70歳までにがんになるリスクは30%。被爆が30歳なら、33%になる
白血病	日本人で生涯で白血病になるのは千人のうち7人。平均200 ³ シーベルトの放射線を受けた人たちでは千人のうち10人上がった
胎児への影響	妊娠8～15週で200 ³ シーベルト以上浴びた場合、知的障害児が生まれる率が浴びた量の増加とともに増えた。16～25週だと500 ³ シーベルトを超えてから影響が出た。0～7週、26週以後は、影響がなかった
遺伝への影響	被爆した親から生まれた子どもの健康状態は、被爆していない親から生まれた子どもと変わらなかった

Q：胎児、乳児、幼児、学童に関してはどうですか？

A：外部被曝、内部被曝はいずれも妊婦、とりわけ胎児に悪影響があります。

それは胎児に対し直接的な影響として、放射線は細胞分裂を阻害する働きがあるので、妊娠 8 ～ 15 週では 100mSv 以上、妊娠 16 ～ 25 週で 200mSv 以上の被曝があると重度精神障害、奇形、胚死亡等の影響があるされておりますが、福島原発事故で富岡地区では、1号原子炉が水素爆発する前に川内に避難し、更に三春・郡山へと避難していますから、被曝量は僅かなはずで、そう心配はないと思います。



もう一つ懸念されることは、女性の卵母細胞への影響があります。女性は胎児の段階で